

人間環境の創造を求めて

構造家・陶器浩一

朝倉幸子◎TH-1
illustration:Taco

■ 組織からの転身

滋賀県立大学教授の陶器浩一さんは、大阪府堺市生まれ。京都大学大学院修士課程を修了した後、日建設計（大阪）で17年間構造設計者として勤務して、教育者へと転身を遂げた構造家だ。2002年には滋賀県立大学で環境科学の博士号を取得している。

「建築少年ではなかった」のは、従兄弟に“神童”がいたため。父親が「建築は儲かるぞ」といったのは、頭のよい息子がダンボールで基地をつくって遊ぶのを見たからかもしれない。京都大学では坪井門下の若林先生ゼミ。構造を選んだ理由は？ と覇志堂。「大きな建物がつくりたかったから！」と、至って純粋な気持ちだったと答える。日建設計入社早々からバブルの波にのまれ、大同生命大阪本社ビル、大阪WTCコスモタワーで256mの超高層や、キーエンス本社ビルを担当するなど、名実ともにデッカイ建築に携わって、主管というポジションにまでなった。油の乗り切った頃に辞めたいきっかけは、陶器さんにとっての「事件」があったから。母校京大で講師をしたときにティーチングアシスタントに、相談された悩みに端を発する。意匠の研究室を逃し構造研に配属されたら、教師から「デザインは捨てろ」といわれたという相談だった。

「構造設計とデザインは関係ないのか!？」。これには覇志堂も苦い顔をする。構造が受け身であることを漠然と憂いていた陶器さんは、これは組織や構造界の問題ではなく、教育の問題だとの想いを強くする。そして、建築家の内井昭蔵教授の退職に伴い、自分と理念が合っていると感じて滋賀県立大学の教職に手を上げたのでした。17年続く自宅のある西宮から往復で通勤4時間は、陶器さんには執筆や創造する貴重な時間なのです。

■ 震災と竹

2012年第8回日本建築大賞に「竹の会所」が選出

された。建設に至るまでの経緯や使われ方、維持のあれこれ、そして2019年3月に解体の様子などは、陶器さんが何時間語っても語り尽くせないドラマです。

物語は建築家・岡田哲史さんとのプロジェクトの中で、気仙沼の高橋鉄工所の高橋和志社長を知り意気投合したことから始まる。造船業として培った技術を生かし、仙台メディアテークを（設計：伊東豊雄建築設計事務所）施工した鉄工所だ。東日本大震災のときは被災した高橋さんを心配して、陶器さんは1か月後には気仙沼に駆けつけたという。何もできない虚しさに襲われるが、被災者が「集まる場所がない」といっているのを聞いて立ち上がる。お金も人も土地も、資材もない状況で、5月から始めたプロジェクトは9月には日本初の竹造建築として出来上がっていた。竹を使ったのは、竹しか材料がなかったから。使った竹は1,000本を超え、建設場所は住民が津波被害をうけた自宅の土地を提供してくれた。滋賀県立大学をはじめ、各大学から学生が集まりセルフビルドは途切れなく続き、雨の中、嵐の中も若者たちががんばった。設計者、陶器浩一が施主・施工者であり、行政をも納得させて確認申請を下ろした。7年半の許可満了を迎えて、皆の手で解体され、地元の虎舞も披露された。今も復興の箱舟として残る「たけとも」だが、陶器さんの底知れない力はどこからくるのだろう。

◎ 構造設計とは人を元気にする仕事

「維持可能な人間環境をつくるのが自分の研究課題」。「このプロジェクトに参加した学生たちが10年、20年経って、経験したことで得たことの意義をその時に感じてくれたら」。教育者になるべくしてなった陶器浩一さんである。

